

中近世の謎について

三 沢 諄 治 郎

一

謎の古いものとしては誰でも奈良時代の「歌経標式」に見える

祢須弥能伊弊 与祢都岐不留比 紀呼岐利天 比岐々利伊堤須
与都等伊不加蘇礼

を挙げる。これが「鼠の家」「粉」「火」「四」で「あなこひし」となることは、すぐに中世の「徒然草」第六十二段の

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじ

ゆがみもじとぞ君はおほゆる

「こいしく」に連系するものであらう。これは鎌倉時代、後醍醐天皇の皇女延政門院の御幼時の詠とすることであるが、「ふたつ文字」云々は普通に幼女の考えつきそうな表現ではないから、恐らく当時そうした謎の言い草が相当ひろく行われていたのだらうと思う。

近世に入って富士谷成章の随筆「大海のはし」に

本源自性院入道関白殿近衛信尋公法名応山に、光悦が鯉を奉るとて

をりあらば申させ給へ ふたつもじ

うしのつの文字 奉るなり

いをのなのそれにはあらで ふたつもじ

御かへし

牛の角もじひまあらば ちと

とあるのもその直系で、云うまでもなく前者は「鯉」後者は「来い」の意である。信尋公は慶安二年、光悦は寛永十四年歿であるから時代は丁度近世の初期にあたる。

「大海のはし」には、この他に次のような謎を書きとめている。

一とせ、なぜなぞ文字といふもの、内院にももてあそばせ給ひけり

(1) たにのら

たうがみ

(2) むかふのきしくらくして、船こゑしてよぶ 三みせん

これらはみんのつくらせ給へるとなん。

又、たれかつくりけむ

(3) 人をうらみて月みゝかし入る

(4) 内侍のうへのきぬ藏人の下がさぬしとど ぼたん

(5) はすまでだぬる三把の木

又、為綱卿の作られし、なぜなぞほくとて、人のかたりしは、

(6) さみだれの雲に入りぬる郭公 桃。

右の「内院」「ゑん」とあるのは年代の上から後桜町上皇にあたるようである。(1)(2)(3)の如き謎は中世に極くありふれたもので、有名な

後奈良天皇御撰「何曾」の中にも同じような題が多い。

(1)の解は誰も知る通り、「たに」は「たに」を意味し「た」と解く。「とら」は十二支の寅で卯の上に位するから「卯上」と解く。「た」
「うかみ」で「疊紙」が答である。

(3)は「人」という字を裏面から見ると「入」、「月みゝかし」は「月みしかし」の誤であらう。「月短し」と解し、月の字を短く詰めて書く意で、平仮名の「る」の字であらう。又「入日」となつてる書もある。下の「入る」は誤つて答が本題に密着してしまつたのである。このように(3)は文字の形を主題としたものであるから「ふたつもじ」の系統に属するが、(1)の方は仮名文字の組合せを中心とした問題である。

(1)と同じ系統のものを「何曾」の中から拾ひあげると、

(21) うみなかのかへる。

(24) 四季のさきに鬼あり。

(45) 内侍の上のきぬ、とののがさね。

(74) 火ばちの下に炭がしら

(85) 深山路やみ山がくれのうす紅葉もみぢは散りてあとかたもなし。
「茶臼」

(87) 宇佐も宮、熊野もおなじ神なれば、伊勢・住吉もおなじ神々
「うぐいす」

(91) 文机の上の源氏の九の巻。
「ふすま」

(98) 鉢の中の海藻。
「しめし」

(109) かどの中の神鳴。
「唐絲」

(110) みたらしのみそぎ。
「たらし」

(122) 山がらが山を離れてこそごとし。
「唐錦」

(133) にかみにがみゆがみゆがみ。
「ははきぎ」

(139) 稚児の髪なきは法師には劣り、田舎に置け。
「碁石」

(140) たまづぎの中は ことば。
「松」

(142) 嵐ののち紅葉道をうづむ。
「霜」

(152) 道風ののち佐理手跡には上もなし。
「盗跖」

(153) 西行は悟りて後かみをそる。
「経」

(155) 義朝はよしなき父の首をとり、弓取りながら弓を捨てける。
「友千鳥」

(157) 一の谷の合戦に一の名を挙げしは、九郎判官義経、熊谷次郎直実、これらは皆かへしあはせし故。
「くぐい」

(158) 四季のはじめ、月のをはり。
「花扇」

(165) 源氏のはじめ、袷衣のはじめ、人に申さん。
「伊勢物語」

(166) 明石の上、桐壺の更衣には劣り。
「すまい」

(167) 武蔵野は果てもなし。
「むさし」

(169) 車のうへへこしは劣れり。
「櫛」

(170) 谷のとら。
「たうがみ」

(174) 谷の水、柱はなかばとけたり。
「たたら」

(181) 袷は背ふくろび、半臂は半ば破れぬ。
「あはび」

(182) 宇治橋の上にて伊豆守はうたれぬ、頼政はかたなを取られぬ。
「大秦」

(184) 山雀は山を離れてやつしては葉もなき秋の上にて居れ。
「唐錦」

(188) 猿栗まはす。
「くすり」

(189) 宿の柳に花のころ、など花のなき。
「ところ」

(151) 年立帰る年のはじめ。

「しとど」

何れも仮名文字の組合せ(加除や転倒)^(注2)を主題としたもので、「上・中・下」という位置を示す語の外に、「かへす」「うたる」「うづむ」「そく」「そく」「かくる」とける「ふくろぶ」「やぶる」「かきわけ」「かさね」「捨つ」「とる」「帰る」「さる」などの指定語が使われている。中にも「佐理」は「去り」、[▲]「悟り」は「さ取り」、[▲]「柳」は「や無き」、[▲]「劣り」は「尾とり」の意を巧みに隠している。殊に注目すべきは(45)の「のきぬ」という語であるが、これについては後に更に述べるであらう。

右に挙げたのは「何曾」の中でも初歩的な、解の容易な謎の類であるが、それでも念のため二三について略解を加えよう。

(21) うみなかのかへる。

「つた」

は十二支の卯と巳との中間、即ち辰を転倒せよとの意である。

(87) の「神々」は「上々」の意であること、言うまでもあるまい。

(98) 「鉢の中」は「八」を「四・四」に分解してその中に海藻即ち「め」を入れる。

(122) 「去年今年」は「二つの四季」で「にしき」。

(156) 「四季のはじめ」は春・夏・秋・冬の初めの仮名で「は・な・あ・ふ」、それに「月」の終りの仮名「き」を添える。

(24) 「四季のさきに鬼あり」も同様である。但しこの場合「鬼」は「キ」とよむ。

(16) 「源氏のはじめ」は「いづれのおはん時にか……」であるから「い」、「狭衣のはじめ」は「少年の春は惜しめどもとどまらぬ……」であるから「せ」、「人に申さん」は「物語」と解する。

(184) 「やつして」は「八つ」で「二四」と解す。(188) 「猿栗まは

す」の猿は添言葉で別に意はなく、或は「去る」でそのまま除き「くり」の間(ま)は「す」というので「す」を入れるだけである。

「大海のはし」の(4)と「何曾」の(45)とは同じ趣向のもので、「内侍」の上「退きぬ」で「し」と解し、「くらうど」の下「かさね」で「とど」、又「との」の上「かさね」でも同意になる。「しとど」は小鳥の名。

「大海のはし」の(5)には誤写があり、これは

(5) はすまで たばぬる 三把の木。「ほたん」となるべきものであらう。謎解きの慣例によって考えると、「は澄まで」は「ほ」を濁るわけだから「ほ」、「た撥ぬる」で「たん」となる。「三把の木」は「三把退き」で消えるわけ。答の「ほたん」が前の行へまぎれ込んでいる。謎の難解なものには右の例のように誤写などによる原因が多い。さきに述べた「大海のはし」の(5)などにも誤写があった。「何曾」にもそうした例が少なくない。

二

後奈良院の「何曾」には一九三題の謎が集められている。中で、(23) 母には二たびあひたれども、父には一度もあはず。

「くちびる」

が新村博士によって明解を与えられたことは余りにも有名であると同時に、国語学上の獲がたい尊い資料というべきである。元来「何曾」は嘉永二年に本居内遠翁が一度全問題に亘って一応の解釈を試みていたのであるが(本居宜長全集に収む)、解決不能の謎も若干あり、こ

の(22)なども翁は「齒々」「乳」など苦しい解をして居る。中には全く匙を投げた題もある。

(3) 瀧の響に夢ぞおどろく。

「あいさめ」

なども翁が「解しがたし」として捨てたものであるが、愚按するに、「夢ぞおどろく」は「覚め」と解し、「瀧のひびき」は「あひさめ」の母韻で「a」「i」と解すべきであろう。答の「あいさめ」は「あいさ」という鳥の名で普通には「あひ鴨」という。それに「つばめ」「つばくらめ」「かもめ」「すずめ」などの「め」をつけたものだろうと思う。母韻を「ひびき」ということは韻学家の間では広く使用せられた語である。これなどは、やはり国語学に縁の深い題といふべきだろう。又、同書

(30) はらの中の子のごゑ。

「はしら」

は、「はら」の中間に「子」の字音「シ」を入れるのである。字音を「声」というのも韻学家の用語で、古くは「宇津保物語」藏開にやがて一度は訓に、一度は声に読ませ給ひて、——とあり、宣長の著「字音仮字用格」を「もじごゑかなづかひ」と読ませているのもその一例である。

この辺で、前掲した「大海のはし」の(2)を解して見よう。

(2) 向ふの岸暗くして、船こゑして呼ぶ。

「三味線」

「向ふの岸」は「彼岸」、「彼岸が暗い」とは即ち悟道が浅い意であるから、下位僧侶の「沙弥」と解する。「船」の字を声で呼ぶとは字音で「セン」と読むことである。成章は「これらは院の作らせ結へるとなん」と言ったが、「たにのとら」は後奈良院の「何曾」(20)にも見えるから室町時代にすで行われたものであることは明らかだ。

「大海のはし」の中で、

(6) さみだれの雲に入りぬる郭公。

「桃」

これなどは難解の部に属するものであるが、以上に述べ来たような「なぞ解き」の鍵(慣例)によって解いて見よう。
右の謎は一種の発句の形になって居り、表面の意は明らかなるもので何ら苦澁するところがない。今これを裏面の意味の上から三段に分解する。

「さみだれ のく」 「もに」 「入りぬる 郭公」

「のく」「入りぬる」は例によって消去を意味する指定語であるから、「さみだれ」も「郭公」もみな消えて姿をかくすのである。すると残るものは「もに」だけになる。「たにのとら」と同じ筆法で、これを「もに」と解し「もも」と決着する。成章の文によると、これは為綱卿の作であるとかいう。為綱卿ならば、大原の三寂といわれた寂念・寂然・寂超兄弟のうちの寂超即ち藤原為隆の息である。寂然が歌僧西行と親交のあったことは有名であるから為綱も大体鎌倉前期の人であろう。

三

この「のく」という「なぞ解き語」から、すぐ連想せられるのは「徒然草」百三十五段にある「馬のきつりやう」の難題である。

大納言入道資季と宰相中將具氏とが帝の御前で勝負を争う一段で、問者の具氏卿は落ちつき払って

はかばかしき事は片端もまねび知り侍らねば尋ね申すまでもなし。何となきそゞろごとの中に、おぼつかなき事をこそ問ひ奉らむ。

と申される。このした手に出た相手に大納言入道はすっかり乗せられ

て、まして、ここもとの浅き事は何事なりともあきらめ申さん。と反りかえる。所が意外にも具氏卿の出したのは、

をさなくより聞きならひ侍れど、その心知らぬ事侍り。

「むまのきつりやう、きつにのをかなかくはれいりくれんとう」と申すことは、いかなる心にか侍らん、承らん。

というので、流石の入道も負けになつて賭の御馳走を奢らされたといふ笑話である。

これは全く「何となきそざろごと」であつて、チベット語や何かで解すべき筋のものではない、明らかに「なぞなぞ」であることは以上述べ来たところから見ても合点が行くであらう。例の「のく」「入る」という指定語が使つてある。佐野保太郎氏の「徒然草講義」には山崎美成の「海録」を引いて要を尽しているが、その中に蜀山人の文があり、惟中の「寂寞草」南郭の「大東世語」保己一の語などを挙げてい

る。それによると保己一は二つの解を紹介していることになる。

(1)馬吉良、(右の文では馬扁に良)、狐丘_四入_九連_倒一_で、駿馬も狐の丘に躡きて、ぐれんとうと倒るる事ありといふ誠めなり云々。

(2)又一説に「なぞなぞ」にして、馬のきつは五字をとる也。りやうきつねのをか_△の字、中くぼれ入りてなければ、りかの字残る。

之をぐれんとうと倒まにかへせば、かりといふ謎なり。かゝる悪説も無きには勝らぬ。

「と、検校は笑ひ給へりき」と蜀山人は書いている。

右の解の(1)は、とりも直さず謎の表面の意味、(2)は裏面の意味にあり、一説として区別すべきものではない。言いかえて見ると即ち、

(1)表の意味は、

馬の吉良、狐の丘、中四れ入り、ぐれんとう。

で、「馬の吉良」という語は他に用例は見あたらぬが、「吉良」は檜校の挙げた通り「山海經」に見える「文馬」(今の驕馬の類か)か何かで、何でも異域の駿馬を言ひはやした語であるらしい。

それについて高田与清の「松屋筆記」に、

唐書四十七、百官志二に、尙乘局、奉御二人、直長十人、掌_内外閑廐之馬一、左右六閑、一曰飛黃、二曰吉良、云々

と見える。今「唐書」に就いて見ると、三曰童媒、四曰(馬扁に陶の作り、馬扁に余)、五曰(馬扁に夫、馬扁に是)、六曰天苑と何れも閑(馬屋)の名称であるが同時に駿馬の別称の意を含んでいるように受取れる。同書、則天武后のところにも、

武后万歲通天元年、置仗内六閑、一曰飛竜、二曰祥麟、三曰鳳苑、

四曰(宛扁に鳥)鸞、五曰吉良、六曰六群。

又、「毎歲、河隴群牧、進其良」とも見える。「吉」は精良なるものを指すに用いること、「吉金」「吉器」などの例がある。

この駿馬を意味する名が、恰も「東方朔」や「奢婆・扁鵲」の例の如く、当時の幼童間にまで流れ語られたものではなからうか。

「狐の丘」は「吉良」と口拍子を合せたもので、一種のはやし言葉になつてゐる。「きつに」は「きつね」の小兒語的に訛つたのか、或はそのまま「きつにのをか」でも一向差しかえがない。「ぐれんとう」は「ぐれんとう」で、今の「ずでんとう」と同じような擬容語で

あろうか。或は方言などに似寄りの語が残っては居まいか、専門家にうかがいたい。

そんなわけで、表面の全体としての意味は検校の言った通りでまづまづよからう。さて、

(2)裏の意味は、

馬退きつ、「りやうきつにのをか」、中凹^Bれ入り、ぐれん^Cどう。

A・B・C共に、なぞの指定語である。「馬」を消去し、「りやうきつにのをか」の中間を取り捨てて、両端の「り・か」を顛倒させよというのだから、なぞの上では「りやうきつにのをか」の意味が何であらうと問うところではない。この場合「のきつ」という指定語が「馬の吉良」の中に巧みに隠されているのが、このなぞの身上であらう。しかし、中近世の人々には「のき」「のきぬ」「のきつ」「のく」などのなぞ言葉はすでに熟していた筈である。更に「中凹れ入り」も「ぐれんどう」も当時の用語として大抵察し得られたことであらう。ただ、これを「なぞ」と見ずに、表の意味だけに拘泥する学者たちにとって「入」=「衢運動」などとするから難題であったのである。

堀保己一の門人、屋代弘賢（輪池翁）の話として（佐野氏の注参看）
検校の説といへるは、もと萩原宗固の説なり、又雁の謎と解きしは閑田耕筆にいでて、もとは富士谷千右衛門が考なり。検校もこの説を悪説といはれず。この両説にて千古の疑初めて釈然たりといはれき。

とある。即ち、(1)の表面の意は歌人萩原宗固の説、(2)は富士谷成章の考であるという。蓋蹊の「閑田耕筆」によれば、なぞとして解いたの

は柏原瓦全ということになる。瓦全は俳人の五升庵蹊夢と同一人という説があり、瓦全と成章とは如何なる関係があるのか、又何れがなぞの真の解答者なのか、今は詮索のいとまを持たぬが、成章がなぞに多大の興味を有していたことだけは前掲の「大海のはし」によって明らかである。

堀検校が表の意味と裏の意味とをつき合わせて見て始めて千古の疑團が氷解したといったのはなぞには必ず表と裏の意味があるという点から観て当然なことである。

佐野氏も言われたことだが、このなぞを解いた人を伴蹊とするのは、見当ちがいである。

「馬のきつりやう」のなぞは具氏卿が幼時から聞きなれたというのであれば、卿は建治元年（1275）に四十四才で歿しているから、後醍醐・後深草の御代（1312—1359）には既にそれが言いはやされていたわけで、丁度「ふたつ文字、牛のつ文字……」と同時代であり、すなわち鎌倉前期にあたる。「五月雨の雲にかくる、郭公」と詠んだ為綱卿とも時代があい前後する。為綱卿の時代に、すでに「のく」「入る」という「なぞの隠語」を使っていたとすれば、その前後に「馬のきつ」という謎の存在したのも、無理な話ではなからう。

(1958・9・9)

(注1) 日本韻筆大成による。

(注2) 阪倉教授の「謎」（東山論叢、第一巻）に「接合の謎」

「添加の謎」「削除の謎」「逆読の謎」とあるのにあたる。